

原典で読む

外国人が見た日本

高橋知明

瀬田玉川神社禰宜



第二十一回 ラインホルト・ヴェルナー 『エルベ号艦長幕末記』(上)

「至る所に書店がある。さらにすべての古書店に民衆が好んで買い求め愛読する古書が山積されている」

今回ご紹介する人物は、一八六〇年から一八六二年にかけて日本を訪れた、プロイセンのオイレンブルク伯爵節団の一員で、使節団を運んできたエルベ号の艦長・海軍将校のラインホルト・ヴェルナー(一八二五―一九〇九)です。

エルベ号が来日したのは、桜田門外の変が起った万延元年(一八六〇)のこと。その二年前に日米が通商条約を締結したのを皮切りに、英、仏など五カ国が次々と通商条約を締結する中、当時まだ統一国家になつていなかったドイツにお

となり、ドイツ帝国も成立し、日独関係は緊密になって行きます。
さて、ヴェルナーは、約二年間というわずかな滞在期間に、当時の日本の政治、経済、文化、風俗などを総合的に観察し、多くのことを絶賛しています。ただし、一方では僧侶やお齒黒、女性の化粧などに対しては低評価を下すなど、率直な見方をしています。そして、その観察眼と表現力は、以前紹介したオリファントと同様に、まるでスパイかと思わせるほど、日本をよく見ています。

いったい、日本をどう見たのでしょうか。先ず彼が驚嘆したことは、日本人の各層に至るまでの識字率の高さです。

「日本では、召使い女がたがいに親しい友達に手紙を書くために、余暇を利用して、ぼろをまとった肉体労働者でも、読み書きができることでわれわれを驚かす。民衆教育についてわれわれが観察したところによれば、読み書きが全然できない文盲は全体の一パーセントにすぎない。世界の他のどこの国が、自国についてこのようなことを主張できようか」

上流階級はもちろん、庶民に至るまで読み書きができることは、世界水準を大きく上回っていたことがわかります。

どうしてこんなことが成り得たのでし

ようか。一つには日本人が好奇心旺盛で、知識を得るためにはなりふりかまわず貪欲であると彼は捉えています。

「日本の学問それ自体は、中国よりもずっと高い水準にある。日本人は発展途上の文化的民族であり、隣国の中国人よりもすぐれた偉大な精神的特質を備えている。日本人はおのれ自身を過大評価することなく、自分を地球上で唯一の教養ある民族であるとみなす笑うべき尊大さをもっていない。その逆に、日本人は喜んでヨーロッパ人の優越性を認識し、ひるむことなくヨーロッパ人を師とあおぎ、彼らの行動や書籍から、おのれ自身に知らないことを習得しようとつとめている。そのさい日本人の異常なほどの模倣能力がきわめて役立っている。しかもこの能力は、中国におけるように、機械的、形式的なものに制限されず、理念や精神の理解にまで及んでいる。」

日本人の好奇心は異常に強い。そして猜疑心の強い幕府の出先機関によってたち聞きされる心配のないときには、彼らは外国人に質問することによって、あらゆる方式でおのれの知識の蓄積をふやしていくとつとめている」

こうした日本人の性格は、町にこんなものを溢れさせます。
「至る所に書店がある。さらにすべての古書店に民衆が好んで買い求め愛読す

る古書が山積されている」

そして、陳列される本の内容も、観察能力の高さが窺えるものが多くありました。

「技術的、自然科学的内容のものが多かった。たとえば遠征隊に加わった農業関係者は、一八冊に及ぶ四つ折り判の農業技術百科全書を入手したが、これにはすばらしく精巧につくられた数千枚の木版画が文中に印刷されていた。これらの木版画は、あまりにも微細忠実に描かれているので、日本語に通じない者にも実に内容が豊富で、きめのこまかい文章の意味をさとらせてくれる。わたし自身は、日本近海に出没する海魚の図版と記述を含む三巻本の自然誌を所有している。素描はきわめて正確であり、銅版画の彩色もあまりに自然なので、これがどの魚だということがすぐわかる」

さらに彼は、日本人は海外から輸入されたものを、精巧に模倣するだけでなく、それに工夫を加え、さらに素晴らしい作品に仕上げる能力があると称賛しています。

「磁器はすこぶるすばらしい。中国の磁器にくらべると優雅で透きとおるような美しさをもっており、同時に強度も大変優れている」「日本のデザインは、一

から十まで独創的で魅力に富み、絶妙な美しさと繊細さの点では日本が誇る漆器と一脈相通するものがある。なかでも、特にわたしの心をとらえたのは、すぐれた熟練作業によってつくり出される豪華な絵模様が独創的なアンバランス―このような表現が許されるなら―を示していることである。たとえば、座卓、たんす、衣装箱などでは、絵柄はけっして左右対称でもないし、中央部に描かれてもいないが、このようなアンバランスはたとえようもない魅力をかもしだしている」

「われわれヨーロッパ人がどうあがいても足もとにも及ばない螺鈿木工細工も同様である。わたしは寄せ木細工のたんすを所有しているが、模様ひとつとっても、どれも似ているものはなく、変化に富んでいる」

日本の磁器や螺鈿細工は発祥地を遙かに凌ぐほど高度に洗練されている。このようにみたヴェルナーは、こう予見します。

「数々のヨーロッパ製品に対し、日本国内からいざれ強敵が出現するのは目に見えている。日本民族の器用さと模倣の才能は、確実にこのことを予想させる。日本市場をあらん限りのヨーロッパ製品で埋めつくすことができるなどは夢々考えてはならない」と。